



終末期患者の入院や在宅でのホスピスケアを行っている「野の花診療所」（鳥取市）。2001年に診療所を立ち上げた徳永進医師は、多くの患者の看取りを行ってきました。『こんなときどうする？～臨床のなかの問い～』という本では、患者本人だけではなく、家族をも巻き込んだ教科書通りにはいかない現場の様子を、ありのままに綴っておられます。



「最期まで家で母を看取ろうと思います」と言う姉妹がいた。母である患者さんは56歳、肺小胞がん、脳転移、骨転移で呼名反応はなく、寝たきり。

…ある日の夜、診療所にその姉妹から電話が入った。「母の呼吸がおかしいんです。すぐをお願いします」。すぐに診療所を飛び出した。家で最期の息となったのなら、姉妹の希望が叶えられ、それはそれで良かったのかも知れないと思いながら車を走らせた。

家の前まで行って驚いた。救急車が赤いランプを回して止まっている。…家で看取るんじゃないのかと一瞬思ったが、見たことのない息遣いを見れば誰だってあわてる、と思い直した。…「どうします？」と姉妹に問うた。「家でなくていいです。先生の診療所へお願いします」。

…死の場所については、さまざまな状況でいか様にも変わり得る、それでいい、と心に納めておきたい。**どこでもいい、と。いつ変わってもいい、と。**…大切なことは、患者さんや家族の気持ちが変わった時にしろ、死の場の変更の申し出があった時にしろ、すぐにその気持ちに沿うように、沿えるようになるよう、訓練することだろう。

人間の意志とは何でしょうか。一般的には「変わらず、貫き通すことこそ素晴らしい」とされています。しかし一方で変わろうとしないことは、一つのことに執着すること（煩惱）でもあります。

親鸞聖人のご書物に、「念仏の衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」という言葉があります。「お念仏の者は、阿弥陀如来の御心に抱かれて、命終えたその瞬間、この上ない悟りの仏として浄土に生まれていく」という意味です。

言葉を変えるなら、**いつどこで命終えようと「そこが浄土である」のが、阿弥陀さまの救い**です。この救いには「我が意志を貫き通す」といった強さはなく、「心も意志も定まらないまま」如来におまかせするという道、“安心して”迷い・“安心して”死んでいける道が開かれています。

慧日山 真光寺



徳永医師は、患者さんに語りかけます。

「あせんなんすな(鳥取の方言)…あせらずやって行きますと、ある別れ道、枝道に出くわします。…その枝道でもう一度考えましょう。状況が変わると、考えも今とは少し変わっているかも知れませんか。」…次々に出会う枝道で考え続ける。○も×も刻々と変わる。